



平成三十一年度「総会」特別講演

「俳句の未来」

柿衛文庫理事長 坪内 稔典



稔典です。俳句の未来についてしゃべってくださいと西谷剛周さんに言われたので、はいはいと引き受けたんですけど、考えてみたら、未来のことなんて全然わかりません。わからないといったらお終いになつてしまうので、何か理屈を考えなくてはいけないなど思つて来たんですけど、ぼくが考えてきたことをも

とにして、いづらか俳句の未来にふれることができたらいいなと思つています。

ぼくは現代俳句協会に若い頃に一時期入っていたのですが、すぐやめまして、以来、俳人の組織には関わらないというふうにして、俳句を作ってきた。だから、俳壇や俳句の世界の外で活動してきた感じですので、俳句の結社の大会とかも、特別なことがない限り行かないというふうにしてみました。それで、俳人をあまり知らないのです。それでも、とくに関西の俳人については、若い頃からいろんなところで話をしたり、議論をしてきました。唯一、俳人のグループというか、そういうもので関わっているのは宇多喜代子さんと立ち上げた大阪俳句史研究会というのがあって、その活動を通して、ぼくが三十代くらいだから、いまから四十年くらい前から関西の俳句の人たちと関わりをもつことになりました。それくらいなんです。別に俳句の人が嫌いというわけではないんですけど、自分と俳句との関わりは、若い頃は評論を書いたりすることが主でしたから、そういう立場にいたら、あまり親しくならないほうがいいというか。どこかのグループに入ってしまうと、活動しにくくなるということも考えて、そのままずっときて、つい先日「後期高齢者になりました」という通知が来ましたから、そういう年齢になつてしまいました。

ぼくは別に俳句を研究したわけではなくて、長く大学で

やってきたのは明治の文学です。その一環に正岡子規や夏目漱石がいて、そういう人たちのことを考えてきたのですが、あまり俳句のことをやる人がいないものだから、文学史の本を作ったり、そういうときに頼まれて、だんだん俳句に関わることもいつの間にか増えていたのですが、基本的には、ぼくと俳句の関わりは作ることが楽しい、俳句を考へることが楽しいという立場です。その姿勢はたぶん死ぬまで続くのだろうと思っています。今日お話しするのは、そういうふうにしてぼくが考へてきた俳句の特色が、俳句の未来みたいなものにどこかでつながるかな、ということをお話しできたらいいなと思っています。

先に言いますと、日本のいろんな文学のなかで俳句がもっている最も大きな特色は何かといったら、もちろん極端に短いことなのですが、その短い表現のために他のジャンルにないものがあります。それは何かというと、句会です。句会は、基本的にはその場に集まってみんなで作って、みんなを選び合って、そしてわいわいとやる。誰かが直してくれたら、直したものがよかったら自分の作品になるという。つまり、創作と鑑賞が一体化した場です。目の前で誰かが自分の作品を読んでくれる。これは他の分野ではないですね。小説だってないし、詩だって、短歌だってありません。しかも、俳句の句会の大きな特色は、みなさんが日頃やっていることなのですが、誰が作ったかわからなくして出すということです。つまり、誰が作ったかは関係ない。五七五の表現の技を競うというのが、この形式が始まった頃からの特色だったのではないかと思います。作者のこ

となんてどうでもいいという、大変大きな特色があります。句会というのは、そういう場なのですが、いろいろみると、なんとなく、そういう句会が少なくなるといいます。あまりなくなると、先生が教える句会みたいなものが増えています。いま話したような句会が最も生き生きと行われたのはたぶん、正岡子規の頃かと思います。正岡子規の場合は、彼が寝たきりの病人ですから、彼のまわりに集まるのは、いちばん多く集まったときに四十数人です。それ以上は集まらない。だから、いつも少人数で句会をしています。一日中やって、夜の十二時を過ぎてもまだ句会をやったりしているのですが、とにかくみんなを選び合ってわいわい言うというのが、句会の原点だったのです。先生だけが選んで「はい、おしまい」というのは、句会ではないのです。先生だけが選んで「はい、おしまい」というのがどこから始まったかという、たぶん、高浜虚子が偉くなつてからではないでしょうか。選ばれたらそれでいいというふうになって、先生だけが句を選ぶ、いま、そういうものが句会という名前で広がっていますが、ぼくは、それは句会ではないと思います。句会は、先生格の人もやっぱり同じように投句して、そして選び合って批評を受けて、めっちゃくちゃ言われても仕方がない。だいたい酷評されますね、先生の作品というのは。句会に行きますと、だいたいは取ってもらえないということがあります。それは正しいんですね。もしその先生が本当に実力があつたとしたら、つまり、他のメンバーよりもその先生は優れた句を作るといえるか、大胆な、新しい句を作る能力があるはずだから、誰も取つ

てくれないということが起こりえます。先生が飛びぬけて斬新なんです。下手なのは例外ですよ。そういう丁々発止とやりあう句会がある限り、俳句にはたぶん未来があると、ぼくは思います。

若い人たちがインターネットなどで最近句会をやります。ぼくのグループの若い人たちもやっていますが、ああいうのをやっけていても、話を聞いていると、やっぱりどこかで出会って、一緒にひざを突き合わせて句会をする。そういう傾向がどうも、五七五を囲む表現の場としてはあるのではないか。このところ元号が話題になって、万葉集から取られたというのでいろいろ話題になっていますね。大宰府で開いた「梅花の宴」という宴会に出てくる言葉が元号に取られた。「梅花の宴」について書いた文章を読んでいますと、「空には新蝶が舞い、故雁帰る。昨年雁が帰っていく」。そういうふうなことが書いてあって、そして、その場所ではひざ突き合わせて杯がとびかう、と書いてあります。杯のやりとりをしながら、みんな歌を考えたというのですが、実際にはそんなに飲んでいないような感じがします。歌から考えたら。だけど、理想の場としては、ひざ突き合わせて、みんなで酒を飲みあって、季節の風物がある場所で詩歌を作るといのが、たぶん、万葉集の詩人たちの理想だった。理想というより、それは中国の詩人たちの真似なのですが、そういうふうにして句会に似た集まりが始まったんですね。「梅花の宴」というのは、そういう意味では、句会の一種の先蹤というか、原形みたいなものだと思います。

つまり、ひざ突き合わせて、酒を飲みあって、わいわい、

がやがや言う。そういう場が保障されないと、句会はおもしろくないですね。ぼくのグループなども、最近はおもろ老人になったということもありますが、妙に尊敬されて先生にされてしまいますから、あまり、わいわい、がやがやとならないところがあって、これはいけないと思つています。わいわい、がやがやを保つための工夫がどこかで必要で、ぼくが心がけてきたのは、句会のあとは必ずコーヒーを飲んだり、酒を飲んだりしますよね。しませんか？ 久保（純夫）さんは酒を飲まないでしたね。ぼくはちよつとだけ飲むから、必ず句会が終わったあと居酒屋にいくのです。そのときに、おごられないということがぼくの基本です。飲食は手弁当です。手弁当というか、自分のお金で飲む、食べる。それをしないと、わいわい、がやがやの場が保てないと思うのです。もしここに句会を主宰されている方がおられて、毎回ご馳走になっておられるとしたら、それは俳句の伝統からいったら間違っています、ということになります。飲み食いくらいは自分のお金でしないと、同じ地平に立てないと思うんですね。句会というものがある限り、五七五の文芸は存続するだろうとぼくは思います。その句会は、いま言ったような句会です。

それからもう一つ思っているのは、ふだんの言葉で俳句を作ることです。俳句の専門用語では俗語といいますが。俳句というのは、江戸時代の初めから大流行して、爆発的に流行して、いまよりも江戸時代のほうが盛んだったと思います。いろいろ記録を読むと。なぜ俳句が江戸時代に大流行したかという、難しい言葉で作らなくてもよかつ

たからです。それまでにあつた日本の詩歌は、漢詩は中国の言葉だし、和歌は平安時代の言葉で作らなければいけない。源氏物語や伊勢物語、古今和歌集にある言葉で作らなければいけない。いわゆる雅語というやつです。雅な言葉です。つまり、そういう教養がないと作れない。連歌も同じです。ところが、江戸時代になって、文化というものが、いわゆる町人に開放されます。最初はそれが京都で興るのですが、京都にいた松永貞徳という人を中心にして、ふだん使っている言葉でもないか、俳句はふだんの言葉で作る詩だというので、それでどつと作る人たちが増えて日本中に広がっていったのです。だから、ふだんの言葉、俗語で作ることが伝統的には大事だったとほくは思います。

だけど、いまは九割はそうじゃないですね。いわゆる文語で作っています。文語というのは、現代日本語では日常語ではありません。一種の雅な言葉です。雅語に近い。文語で作っている人は、自分がなぜ文語で俳句を作るのか、問い詰めたほうがいいというのか、問い詰めないとまずいのではないかと思います。ほくなどもいろいろ試行錯誤をして、文語で書いたりいろいろしていたのですが、いまは、俳句はふだん使っている言葉、とくに時代の言葉を使って作る詩なのだというふうに、だんだん自分のうちで折り合いがついてきました。時代の空気みたいなものを言葉がもっていないと、俳句はダメになるといふか。あまりおもしろくなくなつて、一部の人の偏った趣味になるといふことが、歴史的な伝統なのではないかと思ひます。いまの、俳句は日常語なのですといふ言い方は、少し過激かもしれませんが、だけど、そこにしか未来

はないのではないかと思うのです。

さきほど「梅花の宴」の話をしました。が、「梅花の宴」が開かれたのは七三〇年ですから、八世紀の初めです。その頃から、いわゆる春夏秋冬、四季を楽しむということが貴族の間で始まってくるんですね。奈良に都がある頃、七世紀、八世紀くらいが万葉集の時代ですが、その頃から春夏秋冬を楽しむ文化が貴族の間で始まってきて、そして平安京、京都の貴族たちを中心にして、四季の文化というのが、文化の核になっていきます。万葉集には春夏秋冬で歌を少しだけ分けたところがありますが、あまり意識してなくて、たとえば夏の歌を見ても、そこに登場するのはほとんどほととぎすの歌だけです。だから、あまり季節感がない。平安朝になると、四季を楽しむことこそが文化を楽しむことだというようになっていって、たとえば古今和歌集などは春夏秋冬で歌が分けられるし、源氏物語のなかにも、光源氏が春夏秋冬の館をつくつて、そこに自分の恋人たちを住まわせます。春の奥方、夏の奥方、秋の奥方、冬の奥方、それぞれの季節の館に愛人を住まわせる。贅沢の極みです。ほくなんかもあこがれの、よだれが出そうな話です。そんなふうにして、平安時代は京都を中心にして、四季を楽しむ文化が広がっていきました。

季語というのも調べていくと、すぐわかるというか、当然のことなのですが、京都の平安京で季語が始まりますから、季語を楽しむのは都会の文化です。都市の文化です。だいたい、五七五を楽しむ文化が、都会の文化です。今日のように過疎化して山の中に四、五軒あるところで俳句を

作っても、まったくおもしろくないと思います。読者がいないし。読んでもらうためにも半日くらい、持っていくのにかかったりします。言葉が行き交う場所というか、そういうところで俳句は、いつの時代でも栄えてきたのです。江戸時代の最初は、文化の中心、産業の中心は京都でしたから、まず京都で貞門の俳諧が大流行します。たちまち文化が、産業が、大阪に移ります。大阪が天下の台所になると、俳句の中心は大阪に移って、西鶴とか、そういう人たちが現れて、そして文化が花咲きます。それから今度は江戸が都市化して、日本の中心的都市になると、江戸に移っていきます。以来、江戸中心です。ずいぶん長く江戸中心です。いまは明らかに東京中心ですよ。俳句の世界も。

言葉の表現は、言葉が熾烈に行き交うというか、言葉が刺激を受けている場でない、うまくいかないのだと思います。たとえば年を取って閉じこもってしまつて、あまり家から出なくなる。ぼくなどそういう危機が近づいていきますが、そうなることも危険です。あまり言葉が出なくなつて、作れなくなつていく。ぼくは、そういうときは毫碌したらいいかんと思つて、じつは毫碌に可能性をみているのです。毫碌すると、言葉がめちゃくちゃになります。文脈を逸れる。そうしたら、おもしろい五七五がもしかしらだできるかもしれないという可能性をわずかに夢見ていますが、それは夢物語です。

要するに、言葉が最も行き交う場所、それはその時代でも最も産業が栄えている場所です。町や村でも、たとえば江戸時代では酒屋さんが栄えた町で俳句が盛んでした。柿衛

文庫のある伊丹もそうですね。酒の町でした。そこはいろんな国から買い付けにやってきましたりして、それをもてなすために文化が栄えて、俳句の会が開かれたりするんですね。どこでもそうです。たとえば兵庫県の柏原というところも俳句が盛んですが、そこも酒屋さんがあります。だから、時代の産業というものと俳句はとても密接に結びついているわけです。脱線しましたが、季語が都会のものだと言いかけて脱線しました。そういう経過からいっても、季語は本来、都会の文化として盛んになってきました。

ところが江戸時代になって、言葉を集める趣味の人たちが現れたりして、地方のいろんな方言などを集めて辞典を作ったりします。馬琴みたいな人たちが言葉の辞典を編んだりして、いわゆる季語に類するものがたくさん増えます。だけど、それで俳句を作ったわけではなく、そんなにたくさん季語が実際には江戸時代に使われていないのですが、とくに近代になって、農村の言葉が中心になります。ぼくの考えでは、ぼくらまでの時代は、田舎の子が都会へ働きに出る時代でした。明治からずっと。ふるさととは農村なのです。多くの人たちにとつて、今日おいでの方たちもそうかもしれません。ふるさとが農村にある。そのふるさとの言葉が重んじられた。農業に関わる言葉が季語のなかにとてどもたくさん入ってきて、重んじられたのです。それはこの百年くらいの現象だろうとぼくは思います。江戸時代の俳句を読んでいると明らかにそうです。

ぼくなどは、ふるさとへは帰るにも帰れません。帰れないという大変ですが、親がいなくなると、ふるさととは急

に遠くなります。柳田國男という民俗学者が、ふるさととは五十年が行き止まりだといっています。五十年たったら、だいたい親もいなくなるし、きょうだいも年老いて、知っている人もほとんどいなくなる。ぼくなどもそうです。田舎に帰っても知らない人ばかりです。そこでふるさととは切れてしまう。そしていま、日本は都市化してしまって、農村はほんの少数の人しかいない場所になりました。だけど、俳句の人たちは依然として農村季語に頼っているというか、農村季語が広がっているでしょう。それは、古い思い出しにすぎりついている感じにならないかと、ぼくは思うのです。

私たちが暮らしている、たとえば大阪なら大阪という都市が生み出す言葉が、もし季語に未来があるとしたら、そこに意味があるのかもしれないと思います。この前あるところに書いたのです。たとえば、いま流行りの季語というか、よく使われている季語に「青葉雨」があります。まだちよつと青葉には早いかもしれませんが、青葉に降る気持ちのいい雨を「青葉雨」といいます。それが非常によく使われます。「青葉雨」の感覚は、都会の感覚です。過疎化している村のおばさんが青葉雨を楽しむということは、あまり考えられない。青葉雨のような言葉を楽しむのは、大阪や名古屋、東京の人、都市の人だと思ふのです。そういうふうにして新しい季語が生まれていって、古い季語に取って代わるといことが行われる。どんどん代わっていかないといけないですね。

芭蕉が、新しきは俳句の花だといっていますが、歴史的に考えていくと、日本語のうねりみたいなものがあって、

江戸時代の初めに俳句が始まって、ふだんの言葉がどつと使われるようになって、それが大流行する。大阪でとくに大流行して、談林俳諧が盛んになります。井原西鶴など。だけど、談林俳諧というのはほとんどの人が覚えていない、知りません。たとえば井原西鶴の俳句なんて、誰も知らない。一昼夜に二万五千くらい作りました。だけど、早すぎて記録もないし、それは一種のショーです。言葉のショーだったわけです。その時代の人たちを魅了したショーだったのですが、あまりにも過激すぎて、私たちは覚えることもできなかつた。

芭蕉の時代になると、町人というか、平民の人たちが使う日本語がいろんな分野でうまく花開く、といったらいいでしょうか。たとえば西鶴の物語、近松の戯曲、芭蕉の俳句など、同時代に違ったジャンルの人たちも、同じように日本語で優れた仕事をする。それはたぶん、日本語のうねりみたいなものがあって、それが花開いたのだと思います。個人的な才能というよりも、芭蕉に影響した時代の運みみたいなものがとても大きかったのだと思います。芭蕉の時代に俳句は、一種のピークを迎える。だから、以後は何をやっても芭蕉の名残であるといわれる時代が続いているわけです。いまの若い人たちがやるのも、芭蕉の名残だというふうに言われかねないです。

だけど、私たちは、最初に言ったように句会というものをもっていて、それは芭蕉たちになかったことです。芭蕉たちはいわゆる連句の座をもっていました。近代の俳句では、句会という場が新しく確保されました。人々がひざ



突き合わせるという場を確保したのです。近代の文芸はだいたい個人芸で、部屋に座って机に向かってひとりで作るというのが、他のジャンルも含めて文芸のあり方なのですが、俳句はそうではありません。そういう個人芸に終始する人はだめなんです。話題にもならないし、優れた句を作れない。俳句の世界がおもしろいのは、個人の力を超えた句会の力が、作る上にも読む（鑑賞）上にも働くことです。抽象的な話ばかりするとおもしろくないので、これから

先は、ぼくが出会ってきた関西の俳人たちの、とてもすてきな俳句を見ながらお話しすることにします。ぼくが出会ったいちばん年長の俳人といえば、神戸の永田耕衣さんでした。プリントの最初のところ（月の出や印南野に苗余るらし」という、大変大な風景の句を載せています。月が出てきた。印南野というのは播州、あのへんの地域ですが、そこに田植えの苗が余っているらしい。印南野という広い地域なのですが、そこに苗が余るといえるのは、かなり上のほうから見ないと実感できないような風景ですが、大変大きな風景をとらえています。「余

り苗」というのはとても小さいですね。印南野というのは広いし、さらに月は大きい。とても大きなものとても小さなものが同居する。それが可能なのが五七五の不思議な力です。優れた俳句はだいたいそういう構造になっています。とても大きなものと、とても小さなものが同居できるというのが五七五の魅力です。この俳句はその典型だと思っています。これは耕衣さんの若い頃の句です。

〈朝顔や百たび訪はば母死なむ〉。覚えたときからずっと好きな耕衣さんの俳句です。朝顔が咲いている。それを見ながら、百回も母を訪ねたら母は死ぬのだろう、とっています。朝顔が咲いているのですが、それは自分の家なのか、お母さんの家なのか、そのへんは読む人によってたぶん変わります。百回という数字はいい加減で、たくさんという意味ですね。じつにたくさん、何回も訪ねたら母はきつと死ぬだろう。それでは、死ぬから訪ねないのかというと、きつとそうではなくて、訪ねるのでしょね。複雑な心境です。読む人によってさまざまに変わります。〈朝顔や百たび訪はば母死なむ〉。この朝顔も元氣な朝顔……、朝顔は一般的には元氣なのですが、だけど「母死なむ」といつているから、もしかしたら、やや萎れかけた朝顔など想像すると、場面はもっと緊迫感を帯びてきます。

「腸の先づ古び行く揚雲雀」。耕衣さんの俳句は、やや理屈っぽい俳句もあったのですが、これがその代表だと思えます。「揚雲雀」、空で鳴いている雲雀は腸からまず古びていくというのですが、そんなものが見えるかといいたくなるような俳句ですね。雲雀の腸など見えないし、空にいる

雲雀の腸なんてどうして感じるの、と思いますよね。超能力なんです。その超能力がいいなと思つたら、この俳句はいいと思います。だけど、そんなのありえないと思つたら、ダメですよ。耕衣ファンはこういうのをおもしろがったのです。現実にはありえないものを五七五のなかにもつてくる。それは、詩の作り方としては当然あります。詩というのは、現実にはないものを作るから詩なのであって、現実にあるものと同じものを作るのでは、それは詩にはならない。それが原則です。そういうわけで、永田耕衣さんの俳句は、俳句らしさをいろいろ發揮して、ずいぶん魅力があると思います。

ぼくは若い頃、耕衣さんを囲んでみんなでシンポジウムをしたり、いろいろしていたのですが、ぼくは時々しゃべる言葉がオーバーになるといふか、過激になるところがあります。「耕衣さんは有名病だ」と評論に書いたら、えらく嫌われましたが、やや有名な人に弱いところがあつて、有名な人に褒められることを喜びとしたのです。それは俳人としては違ふだろうというのが、若い潔癖なぼくの考えでした。俳人というのは、有名でないことのほうが大事なはずなのです。へよく見れば薺花さく垣根かなが俳句なのであつて、なすなを愛するといふところに執着するのが俳人だとぼくは思つて、耕衣さんに食つてかかったことがあります。だけど、けつこうかわいがつてもらいました。その次に古い俳人が桂信子です。大正三年生まれですからぼくの父親と一緒にです。いま生きていたら百十歳くらいでしょう。へふところに乳房ある憂さ梅雨ながき。ぼく

はこればかり褒めているので、生きていたときの桂さんに「そればかり褒めないでよ」と言われましたが、へふところに乳房ある憂さ梅雨ながき。長い梅雨をふところにある乳房の鬱陶しさで感じている。じつは、ぼくはよくわからないです。ぼくにはないものがある。乳房があると鬱陶しいですか。大きい、いわゆる巨乳とかだつたらわかるけれど、桂さんは別に巨乳ではない。もしかしたら、女であるということの一種の象徴的なものとして乳房をもつてきているのかもしれないけれど、こういう俳句は難しいですね。いまは、あまり男と女の区別をしなくなつたでしょう。へふところに乳房ある憂さ梅雨ながき」といふ句が女性の作だと、簡単には断じられませんよね。今は。男だつて「乳房ある憂さ」はあるのです。

そういうふうに見ると、桂さんの歌はややくいひのです。《野遊びの着物のしめり老夫婦》。これも有名な句で、ぼくも好きだったので、こうして並べてみると、野遊びをして着物がしめる。老夫婦。おもしろいのか、と思ひます。桂さんがいた頃は、人々はまだあまり長生きしなかつた。だから、野遊びに行つてももらさなかつたのと違ひますか。だけど、いまはおしめが必要になつてきて、《野遊びの着物のしめり老夫婦》は現代の感覚で読むと、野遊びに行つたけれども、着物がしめつてしまつた。そんなにしめるまで座つていませんものね。おもしろいではなくて、着物がしめつた。しめるまで長く野原にいるというのは、変ではありませんか。老人夫婦が。何をされるんです？ だから、なんとなくおもしろいしているかな、と。こんなことを

いうと、桂さんがきつと怒っています。桂さんのお墓は、ぼくの住んでいる家のすぐそばにあるのですが、今日は怒られそうです。

〈こはんつぶよく噛んでゐて桜咲く〉。これも有名な俳句です。ぼくもよく引用します。だけど、前の二作の後で、これをパソコンで打っていると、「えっ」と思ったのです。なぜかというところ、ご飯粒を噛むというふうには、ごはんを食べるかな、ぼくは食べないなど。そんななにかご飯を食べるのか。雑穀米とか、玄米とか、食べておられる。ご飯粒をよく噛むという感覚は、こうして三つ並べてみると不思議な感覚です。もしかしたら、桂さんのなかには普通の人と違う感覚があつて、それが桂さんの俳句を際立たせているのかもしれないと思うのです。

桂さんのいちばんのピークは、〈ふとところに乳房ある憂さ梅雨ながき〉というふうには、女の人の裸体というか、裸身というか、それがある意味でむき出しにしたことだと思えます。「ふとところに乳房ある憂さ」の俳句が作られた戦後すぐの時期というのは、いわゆる裸体時代というか、女の人たちが肉体をむき出しにする時代でした。それが時代の先駆者、いいことだった。そういう流れのなかにあるのだと思うのです。

ちなみに、桂さんは、ぼくは近所に住んでいたのですが、さきほど言った大阪俳句史研究会とか、そういうところでしょっちゅう会っていたのですが、会が終わると必ず「坪内さん」と呼んでくれて、「はい、これ。足しにしなさい」とかいつ、ティッシュペーパーに包んで一万円くださる

のです。いくらもらったのかも忘れましたが、学生服を着た頃から桂さんと知り合いだったのですが、ぼくが大学に勤めるようになってもまだそれが続いて、出会うと、ティッシュペーパーの一万円をもらっていたのです。そういうのは、もしかしたら、ぼくらは熱烈に恋愛できるのかもしれない。なかつたな、と。愉快な人でした。

次は後藤比奈夫さんの俳句です。後藤さんはホトトギス系ですから、ふだんはぼくらと違うのですが、大阪俳句史研究会を通じて親しくなっていました。〈蛞蝓といふ字どこやら動き出す〉。蛞蝓という、得体の知れない、書きづらい言葉のおもしろさを遊んでいるんですね。よく見ていたら動くような気がしたというので、感覚としては小学生並みです。

〈東山回して銚を回しけり〉。これはなかなかの名句だと思います。銚回しをしているのですが、それを、東山を回して銚を回したというふうには感じません。本当はまったくそれと逆です。銚が回るから、東山が回ったような感じだということですが、そうではなく、大きな東山を回して、銚が回している。京都の祇園祭が大自然のなかで、大自然に司られている、行われている感じがして、これも大変大きな風景と銚回しという小さな風景をうまく表現しています。そして、五七五だからこそ、魅力のある表現だと思えます。

後藤さんはいま生きていますから、あまり悪口をいってはいけませんけれど、会うとしょっちゅういうのですが、後藤さんはおしゃれです。あるとき、「後藤さんが着ているスーツ、それ、いくらなんですか」と聞いたのです。ものすごくいいものを着ているという噂だったので。そうした

ら「七十万円や」とかいつて、もう二十年くらい前かな、ぼくらはびっくりしました。いまだったら二百万円くらいでしょう、それくらいのスーツを着て俳句を作るという、不思議な人ですね。

金子兜太さんも神戸にいて関西の人だったわけですが、有名な句をそこにあげました。〈彎曲し火傷し爆心地のマラソン〉(どれも口美し晩夏のジャズ一団)。これが金子さんの代表作だろうと思います。俳人はやはり、残した俳句は覚えられないといけないので、ぼくは、晩年の金子さんにはかなり批判的でした。「存在者」とか、訳のわからないことをいつて、文化人みたいになつたらいけない。有名病はダメだといいました。俳人の特色はやはり、五七五の小さな表現にかけることだと思います。金子さんは長生きしましたが、一番いいのは〈彎曲し火傷し爆心地のマラソン〉(どれも口美し晩夏のジャズ一団)、どちらかという若頃の作品ですね、こういう句がピークかと思います。三十代の半ば頃に訪ねていったことがあります。この前、金子さんの日記が出版されて、それをあけてみたら、ぼくが行ったことが細かく書いてありました。それはほとんどぼくの記憶にはなかったのですが、金子さんが書きとめてくれました。関西から坪内たちがやってきた、と。書かれていないのですが、ぼくらは喫茶店でコーヒーをご馳走になって、いろいろ話を聞いたのですが、そのとき金子さんが言った言葉で覚えているのは、「坪内くん、高島屋の屋上から飛び降りろ」。それくらいしないと俳人は話題にならないというのが、金子さんの言い方だったのです。

もちろん、自殺をすすめたわけではないですよ。とにかく印象的なことを考えて、高島屋デパートから飛び降りるような大胆さ、斬新さ、そういうものが必要だということだったと思います。それがとても印象的でした。

それから、鈴木六林男さんの俳句で、ぼくが一番好きなのは〈暗闇の目玉濡らさず泳ぐなり〉という俳句で、何度が潜望鏡のように突き出ていて、泳いでいる。「ゲゲゲの鬼太郎」に目玉オヤジがいましたね。目玉だけ。あれが泳いでいる感じです。漫画的だと思います。目玉だけが暗闇のなかにある。暗闇なのになぜ目玉が見えるのか、真面目な人はそう思います。見えるはずがない、目玉が発光しているのか。目玉オヤジのそういう力で。だけれども、その風景は想像できます。真っ暗ななかに目玉が大きく泳いでいる。目玉が平泳ぎをしているのでしょうか、立ち泳ぎをしているのでしょうか。久保さんは鈴木さんのお弟子さんですが、この目玉は何泳ぎをしているのですか。

久保 どの泳ぎが一番いいと思いますか。

坪内 ぼくはね、静かな平泳ぎがいいかなと思います。あまり波をたてないほうが、目玉のためにはいいですね。じゃあ、久保さんと同じ意見です。この目玉、平泳ぎをしている。

(遠景の桜近景に抱擁す)。シンプルな作です。遠景に桜があつて、近景で誰かが抱擁しているという風景だけを描

いています。作った風景ですよ。作り出した風景で、余分なものをすべて取り払ってしまつて、遠い桜と近くの抱き合っている恋人たちだけを描いた。もしかしたら恋人ともいえないかもしれない、不倫かもしれない。要するに、抱き合っている二人と遠い桜だけを描いて、とてもシンプルに描きました。

林田紀音夫さん。この人はどちらかというとき季語のない俳句を作りました。なんとなく弱々しい感じの人で、出会いと悲しくなるような感じの人でした。〈雲雀より高きものなく訣れけり〉。雲雀より高いものがないままに訣れてきた。この人は、一つの作品を作るのにかなり「考え、考え」して作られた人なので、たとえば「訣れけり」ところに、「訣」の字を使っています。何か決意をしてわかれたのでしょうか。考えないといけない。

〈木琴に日が射しをりて敲くなり〉。これはずっと好きな俳句だったので、今回プリントしたらちよつと気に入りました。いまは木琴というのはあまり使われなくなつたのかな、見なくなりました。何が気になつたかというとき、木琴に日が射すと、木琴が悪くなります。日が射す木琴を敲く状態というのは、いったい何なのかということ、ちよつとわからない。粗末な木琴なのか。楽器だから直射日光を避けるはずです。〈木琴に日が射しをりて敲くなり〉とはどういうことかなと、ちらつと思ひました。そんな強い日ではなくて、今日のような「緑さす」というような感じの日だつたら、いいのかなという感じがしますが、季語がありませんから、そのへんが難しいですね。

季語のない俳句は江戸時代もたくさん作られてきて、多くの働いている柿衛文庫の中心の上島鬼貫など、たくさん無季の俳句を作っていて、無季の句というの、俳句なかではひとつのジャンルです。歴史的には。でも、残念ながら、なかなか名句が作れない。つまり、難しいんですね。それが問題なんだろうと思います。

それから赤尾兜子さんです。鈴木さんや林田さんや赤尾兜子さんは、ある時代の関西の代表的俳人たちで、こういうときに必ずみんな揃つて、そして、その頃はお酒を飲む時代でした。煙草も。それで、こういうところへくると、煙草がもうもうで、終わつたあとはみんな酒を飲むし、不健康な場でした。俳句の場というのは。でも、それがもしかしらこの人たちのエネルギーだったのかもしれないと思います。逆に、私たちはそういう不健康さを失つたから、それに代わる何かを用意しないと、薄っぺらになるかもしれない。

赤尾さんは毎日新聞の記者だったので、よく毎日新聞のそばの喫茶店で議論をしたり、コーヒーを飲ませてもらつたりしたのですが、〈音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢〉が代表作です。蛇が季語ですから、夏になるのかな。音楽の漂う岸を侵していく、蛇の飢えだというのですが、何のことかあまりよくわかりません。もしかしたら、川そのものを蛇といっているのかもしれない。蛇行するといえますね。うねうねすることを蛇行といいます。川そのものが岸を侵しているということなのかもしれないけれども、これが有名な頃はそんなふうには考えられなかつたような気がしま

す。もつと、人間の危機的精神だというふうに読まれていたような感じがします。

同じように（広場に裂けた木 塩のまわりに塩軋み）。広場に裂けた木があります。そして、塩のまわりに塩がきしんでいます。これも広場の風景なのでしょう。これはダリの世界ですね。超現実的な世界だと思います。一時期の俳句は、こういうふうに現実を越えて、超現実的な風景に五七五が突き進んでいたのです。〈木琴に日が射しをりて敲くなり〉もそうかもしれない。〈暗闇の目玉濡らさず泳ぐなり〉もそうかもしれない。これは現実をはるかに越えて、超現実的などともモダンな作品、ある意味、現代アートに近い作品になっているのではないかと思います。これらが発表された頃は、そういうことはあまり考えなかつたです。時間がたつていま、この人たちの作品を読み直すと、この人たちはこういうところまで突き詰めていたのだ、というふうに思うのです。

関西の俳人たちはそれぞれ、とても魅力的な作品を残しています。なんとなく、亡くなった人の俳句はあまり読まないという風潮が、俳句のなかにはあります。わからないことではないです。俳句は自分が作ることのほうが楽しいですから。亡くなつたら読まれなくなる恐れがありますが、さきほど言った句会の席で古い人の俳句をちよつと読む時間をつくるのか、そういうことをすることが、句会を豊かにするかもしれないと思わないでもないです。付録で、この人たちと一緒に俳句を作っていた多くの句もあげました。〈春の風ルルンけんけんあんぼんたん〉〈三

月の甘納豆のうふふふ〉〈水中の河馬が燃えます牡丹雪〉。時間がなくなつたのですが、ぼくは、俳句を始めた頃はとても真面目な考え方をしていた、自分が感じたことや考えたことをそのまま読者に伝えたいというふうに考えていました。それが俳句だし、文学だと思つていたのです。まわりの人たちもだいたいそういうふうに考えていました。自分が考えたこと、感じたことをそのまま読者に伝えたい。一生懸命作つても、句会に出してもなかなか認められないんですね。自分の考えが伝わらないし、もう俳句なんかやめようかなと思ひました。あるとき、締め切りがきてどうしても俳句を作らないといけなくなつて、ふと思いついて、机の上にあつた甘納豆を見て、その甘納豆を中年のぼくと置き換えて、〈二月には甘納豆と坂下る〉〈三月の甘納豆のうふふふ〉〈四月には死んだまねする甘納豆〉というふうに、二月から六月まで作つたのです。そのときの甘納豆は、イメージは中年のぼくでした。

ところが、それを『俳句研究』という雑誌に発表したのですが、いろんな人たちが、「こんなの、ダメや」という人と「これはおもしろい」という人が、勝手に議論を始めたのです。作者としては「えっ」と思つて見ていたのですが、やがてその年の夏から、ぼくのところに甘納豆が届くようになりまして。お歳暮になるとさらに増えて、そしてだんだんこの俳句が広がつていったものですから、ついには神戸のおかめ堂というメーカーから、「わが社の甘納豆ひと揃えです。坪内さんは甘納豆業界の星ですから、これからもがんばってください」と、どさつと届いたのです。じつ

は、甘納豆はあまり好きではなかったのです。だけど、そうなってくるとだんだん好きになって、ついには堺の俳句仲間と一緒に、堺の甘納豆を作っている工場見学にも行ったりして、すっかり自分自身が甘納豆の好きなネンテンに変えられたのです。

そういうことをあるエッセイに書いたら、それが長く、中学校の国語の教科書に載っていたのです。その時期、あちこちの中学生から手紙がくるのです。「作者の気持ちを教えてください。お願いします」。その頃、作者の気持ちが一番大事だったので、文学では。だから手紙がきた。だけど、いま言ったような事情の俳句ですから、作者の気持ちなんてないですよ。困ってしまったって、返事が書けなかった。次々と手紙がくるので、あるとき書いたのです。「俳句の作者に気持ちを聞いてはいけません」。それが俳句です。「あなたが読んだ俳句から感じたことが、その作品の気持ちなのです」と書いて、それは、今までぼくが考えていなかったこと、百八十度違う考えでした。つまり、作者の考えよりも、ぼくから出た言葉を受け取った読者のほうが大事だという考え方です。

そうしたら、ぼく自身も大きく変わりました。それまでは、自分の考え方や思ったことをそのまま表現しようとしてあくせくしていたのですが、そんなことではなくて、自分の俳句がどう読まれるかということのほうが大事だ。そして同時に、人の俳句をどう読むかということも大事だ、というふうに変わった。そうしたら、句会というものがとても大事になってきた。自分のなかでも。ぼくは〈三月の甘納豆のうふふふ〉で百八十度変わって、俳人になって

もいかなという思いをしたのです。以来、甘納豆がいまなお続いていて、多くの俳句で人々が覚えてくれているのはこの句くらいしか、残念ながらないです。

そこにもう一つ〈水中の河馬が燃えます牡丹雪〉をあげおきました。ぼくは河馬が大好きで、河馬の俳句をたくさん作っています。この〈水中の河馬が燃えます牡丹雪〉を発表したときに、亡くなった詩人の大岡信さんが当時「折々のうた」を朝日新聞に書いていて、そこで取り上げてくださいました。こういうことは現実にはありえない、水中の河馬が燃えるなんて、ありえない。だけど、言葉の風景としてはありうる、想像できる。水の中の河馬が燃えている。上から真っ白な牡丹雪がふわふわと舞っているという風景を想像することができる。現実にはないけれど、五七五の言葉の世界ではありうる、と書いてくれました。それは、ぼくにとつてはものすごい啓示というか、ありがたい言葉になりました。

五七五という短い言葉で、現実にはない、もう一つの世界を楽しむ。そういうことが俳句にはあるのではないか、というふう思うのです。俳句は裾野がずいぶん広くて、いまはテレビなどでも話題になっていますが、江戸時代からずっと、いちばん多くの俳句の層は、日々の暮らしのなかで五七五を気軽に楽しむことでした。江戸時代などは一種の懸賞俳句が盛んで、米屋みたいなところに集めて、それを毎月開いて賞品を出していた。いまの宝くじみたいに「牛一頭」「米十俵」とか、ものすごい賞品を出すので幕府に禁止されたりするくらい流行していました。

いまでもその名残があります。一句で五十万円とか、あ
あいうのは出鱈目、そんなに高くしていいの?とか思いま
す。賞品を獲得してもそういう俳句は決して有名にならな
い、残念ながら。だけど、一般には五七五を楽しむという
ことがあって、いわゆる俳人を自覚する、みなさんのよう
な現代俳句協会の会員とかいわれる方たちは、今までの俳
句とほんの少しでも違うもの、今までの俳句の言葉にな
かった何かをもたらず、そういう人たちだと思います。そ
れで集まっておられるのだと思います。

俳句にはほとんど可能性はない感じがします。絶望的な感
じがしますが、何かの拍子にふっと新しい何かができるかも
しれない。それに賭けるしかないですね。それが俳人という
ものなのかなと思います。小説家や詩人、歌人と比べたら、
ずいぶん奇妙な人種ですが、その奇妙さをいよいよ發揮した
ら、いくらか未来が開けるのではないかと思っています。開
けないかもしれません。ありがとうございます。

「俳句の未来」講演の資料

○永田耕衣（明治33）

月の出や印南野に苗余るらし
朝顔や百たび訪はば母死なむ
腸の先づ古び行く揚雲雀

○桂信子（大正3）

ふところの乳房ある憂さ梅雨ながき
野遊びの着物のしめり老夫婦
ごはんつぶよく噛んでゐて桜咲く

○後藤比奈夫（大正6）

蛞蝓といふ字どこやら動き出す
東山回して鉾を回しけり

○金子兜太（大正8）

彎曲し火傷し爆心地のマラソン
どれも口美し晩夏のジャズ一団

○鈴木六林男（大正8）

暗闇の目玉濡らさず泳ぐなり
遠景の桜近景に抱擁す

○林田紀音夫（大正13）

雲雀より高きものなく訣れけり
木琴に日が射しをりて敲くなり

○赤尾兜子（大正14）

音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢
広場に裂けた木 塩のまわりに塩軋み

○坪内稔典（昭和19）

春の風ルンルンけんけんあんぼんたん
三月の甘納豆のうふふふ
水中の河馬が燃えます牡丹雪

※以上、講談社学術文庫「現代の俳句」（平成5）より

これからの俳句の拠点

句会

日常語（俗語）

会長挨拶

関西現代俳句協会会長に就任して

関西現代俳句協会

会長 久保 純夫



このたび会長に任命された久保純夫です。今回就任された役員の方とともに、新しい関西現代俳句協会を作るべく、努めてゆきたいと考えています。皆さまにはさまざまな智慧をお借りしながら尽力します。どうかご支援、ご協力をお願い申し上げます。

基本的に現代俳句協会は個人参加のかたちをとっています。これは俳句作家としての自立を問われることになりません。いい俳句を作りましょう、ということですが、また、私たちに所属する組織があります。夫婦、家族、趣味のサークル、会社などなど。それぞれの集団の制約の中で、私たちは生活しています。各結社、同人誌、この関西現代俳句協会にもその制約の上で成り立っています。そして、その

組織の中でしか活動、実行できないこともたくさんあることでしょう。私は会長として、関西現代俳句協会という組織の中で、何ができるか、何を目指すべきなのか、元・現役員のみなさんと相談しながら、実施してゆきたいと思います。どうか、よろしくお願ひいたします。

さて、今年度の主な行事及び内容をお知らせします。

①総会

4月27日（土）ホテルヴィアール大阪で実施しました。

講演は坪内稔典氏の「俳句の未来」

②第44回句集祭

12月7日（土）ホテル日航奈良で実施

③関西現代俳句大会の実施

募集は令和2年1月1日から2月末日。

④吟行句会

従来の定例会を吟行句会に変更して開催します。ただ今のところ、年2回の予定で、今年の開催地は奈良方面。第1回は6月30日（日）斑鳩の里に決定しています。第2回は10月27日（日）、法隆寺夢殿見学吟行の予定。次年度から各府県の持ち回りで吟行地を決めてゆく予定です。

⑤吉野の桜を守るための色紙・短冊展示頒布会

8月22日（木）、23日（金）に実施。

総会は盛況裡に終了しました。これから実施される行事にぜひご参加ください。吟行句会も楽しいですよ。

関西現代俳句協会事業報告

平成30年7月～31年4月

会長 久保純夫

◆第55回現代俳句全国大会を開催

第55回現代俳句全国大会は平成30年10月27日（土）ANAクラウンプラザホテル京都で開催された。大会参加者は250名。懇親会116名。



総会後の懇親会にて

協会四賞の顕彰及び全国大会優秀作品の表彰。記念講演は松山市立子規記念博物館館長、竹田美喜氏の「明治28年の子規と漱石―愚陀仏庵の52日―」京都での大会は盛会裡に終了。大会役員、青年部のみなさま、ありがとうございました。

◆忘年&第43回句集祭

恒例の「忘年&句集祭」は平成30年12月1日（土）にホテルヴィアール大阪で開催した。

参加者は63名。この催しは関西現代俳句協会独特のもので、俳句上梓者本人と関係の方方とともにみなでお祝いするものです。今年度の対象は17点の著作。会場では各著作が並べられました。また本人が選んだ句集代表作が紹介・披露されました。

◆平成31年度総会

今年の総会は4月27日（土）にホテルヴィアール大阪で開催。出席者は理事会43名、総会75名、後援会、96名、懇親会57名。総会は75名の出席と395名の委任状提出で会員数の1/4を越え成立した。

議長に選出された高橋将夫副会長の議事進行により審議された。何れも理事会の審議事項と変わらず、満場一致の拍手で可決された。

議事

吉田成子会長が新会長に久保純夫を任命、拍手で承認さ

れる。

第1号議案 平成30年度事業報告

第2号議案 平成30年度会計報告及び会計監査

(村田経理部長・古梅監査役・辻本監査役)

第3号議案 平成31年度事業計画(西谷新事務局長)

第4号議案 平成31年度予算案(西谷新事務局長)

第5号議案 次期役員について久保新会長より発表、囑

の提案

新役員 ○印 新任

顧問 伊丹三樹彦 宇多喜代子 柿本多映 鈴鹿仁

谷下一玄 豊長みのる 中井不二男 花谷和子

政野すず子 室生幸太郎 ○吉田成子

○若森京子

会長 ○久保純夫

副会長 ○岡田耕治 ○志村宣子 鈴鹿呂仁

○曾根 毅 高橋将夫 花谷 清

事務局長 ○西谷剛周 広報部長・企画部長を兼務

事務局長補佐 ○蔵田ひろし ○杉浦圭祐 ○外山安龍

○村田あを衣 ○横田明美

経理部長 ○金山桜子

会計監査 ○吉田星子 ○石井 冨

青年部長 久留島元

理事 ○石井 冨 ○上森敦代 江島照美 大谷茂樹

報告事項

音羽和俊 桑田和子 ○妹尾 健 辻本孝子

○中村純代 西原和孝 吉田星子 綿貫伸子

全国大会の会計報告(村田経理部長・会計監査(福嶋雄山))

東京通常総会(3月23日)の報告(西谷新事務局長)

第19回現代俳句大賞 宮坂静生氏 受賞

第56回全国大会(東京) 11月16日に実施

会員増強策について(柏田浪雅幹事長)

◆講演会

講師・坪内稔典氏「俳句の未来」

◆青年部の活動

■平成30年度 関西現代俳句協会青年部 事業報告

○第一回 関西ゼロ句会

日時…二〇一八年五月六日(日)

場所…らこんで中崎1階

参加…16名

○関西現代俳句協会青年部 勉強会

「句集はどこへ行くのか」

日時…二〇一八年七月二十一日(土)

場所…梅田パシフィックビルディング6階B室

参加…30名

○第二回 関西ゼロ句会

日時…二〇一八年八月十九日(日)

場所…JEC日本研修センター伊丹
参加…8名

○第三回 関西ゼロ句会

日時…二〇一八年十一月十七日(土)
場所…天満橋大宗ビル5階 spin off
参加…13名

○現代俳句協会青年部 勉強会

「戦後俳句を聞く(1) ～坪内稔典と片言の力～」

日時…二〇一八年十二月二十三日(日)

場所…財団法人柿衛文庫 講座室

参加…50名

○第四回 関西ゼロ句会

日時…二〇一九年二月十六日

場所…らこんで中崎2階

参加…8名

○俳句甲子園関西オープン戦 協賛

日時①…二〇一九年三月二十一日(木)

会場…滋賀県立彦根根高等学校

(滋賀県彦根市金亀町4-7)

日時②…二〇一九年三月二十三日(土)

会場…和歌山県立海南高等学校

(和歌山県海南市大野中651)

趣意に賛同し、協賛。久留島元、曾根毅が審査員参加。

■令和元年度 関西現代俳句協会青年部企画

○第5回 関西ゼロ句会

日時…二〇一九年五月十一日(土)

場所…天満橋大宗ビル5階 spin off

参加…9名

次回は八月開催予定。

○関西現代俳句協会青年部 勉強会

「戦後俳句を聞く(2) ～竹中宏と「写生」と「定型」～」

日時…二〇一九年六月二十二日(土)

場所…財団法人柿衛文庫 講座室

○俳句甲子園関西オープン戦 協賛

俳句甲子園出場校の育成、振興を目的とする。俳句甲子

園実行委員会の要請があれば今後も継続協賛。

■青年部部长 コメント

昨年度より発足した青年部主催「関西ゼロ句会」は、年齢、所属に関わらず参加できる超結社句会として関西で活動する作家同士の交流の場となっています。今後三ヶ月に一回程度、定例開催の予定です。日時、会場など詳細はホームページで告知いたしますので、是非ご参加ください。また「戦後俳句を聞く」インタビュも継続して行う予定です。よろしくお願いいたします。

忘年&句集祭はホテル日航奈良

総会の会場は従来通りですが、今年から忘年&句集祭の会場をホテルヴィアール大阪から、ホテル日航奈良に変更します。変更の理由は、JR奈良駅の改札口から同じフロアの徒歩1分という立地条件で階段の上り下りがないことや、初めての方でも分かりやすく、JR大阪駅・JR京都駅から乗り継ぎ無しという利便さを考慮した結果です。

今年の開催は、12月7日(土)です。句集を上梓された方は、事務局まで句集一冊を添えて、ご報告下さい。関西現代俳句協会のホームページや会報で紹介します。

定例会から吟行に

会員の交流を深め、関西現代俳句協会の一員としての連帯を深めるために、定例会から吟行に切り替えます。今年度は奈良県、来年度は京都、滋賀、兵庫、大阪、和歌山と、毎年関西の各府県を持ち回りの吟行会にしていきたいと思っています。各府県の会員の皆様にご協力を願わなければ出来ない事業ですので、宜しくお願い致します。

第1回は、6月30日(日)奈良・斑鳩の里、西谷剛周のれんげ小屋。手作りの石窯で、ピザや鯛の塩釜、ローストビーフ、燻製の窯でチーズや鴨等を燻製したり、非日常の体験を句材に作句できればと企画、句会場はれんげ小屋。

生ビールのサーバーも備え付けていますので、句会後の懇親会も十分満足して頂けると思います。

調理は参加者として頂きますので、エプロン持参でお願いします。参加費は3千円(句会参加費千円・昼食・懇親会費2千円) JR法隆寺駅南口9時30分集合。先着順で定員は40名、参加申込の締め切りは6月15日。定員を超える時は、秋に同じ企画を実施。

2回目は、10月27日(日)法隆寺周辺の吟行です。藤ノ木古墳、斑鳩文化財センター、歴史的町並みの残る西里、小林一茶の「おらが春」のなかで登場する継子地蔵や在原型平ゆかりの業平姿見の井戸等、隠れた斑鳩の良さを知る吟行。法隆寺夢殿の救世観音の秘仏公開の時期中です。定員は80名、句会参加費は千円。昼食は各自。句会場は、法隆寺参道沿いの法隆寺iセンター、JR法隆寺駅南口9時30分集合。詳しくは10月の会報に掲載。

お得な奈良吟行

西谷剛周

吟行の幹事になってご苦労されている皆さんに、地元ならではのとおきおきの奈良の情報をお知らせします。

奈良市の奈良町です。近鉄奈良駅、JR奈良駅から徒歩20分。江戸時代のおもちゃを再現した、「奈良からくりおもちゃ館」(無料。団体の時は事前予約をすると、説明してくれる0742-26-5656)。大人でも夢中にな

る施設です。酒好きには、「今西酒造」の試飲（500円で、蔵元の酒5種類を試飲。帰りにぐい呑みのプレゼント）。

「あしびの郷」奈良町の入口にある。団体で食事をすれば、蔵座敷で句会、無料。堀炬燵式で、定員20名。事前予約が必要。074212616662 周辺に元興寺や奈良町資料館、庚申堂、猿沢池あり。

「手作り豆腐大和きらら純」近鉄奈良駅から徒歩1分。団体で食事をすれば、隣の部屋を句会場として無料で使用できる。074212611313 予約が必要。定員20名。

農家レストラン「日本料理ほそかわ」宇陀市。近鉄大阪線の近鉄榛原駅から車で10分ほど。送迎あり。古民家を改装した山間の割烹。団体で食事をすれば、無料で句会が出来る。定員12名。和室だが、テーブルと椅子席。春には山桜が満開。夕方、庭先に鹿が来るといふ環境。074518513009 予約が必要。

「藤岡家住宅」五條市。10人以上揃えば、JR和歌山線北宇智駅から赤のベントのバスで送迎。師事した高浜虚子に「大和の大桜」と讃えられた俳人、藤岡玉骨の生家。高浜虚子、阿波野青畝等の短冊、書簡を展示。それ以外にも、郷土玩具や民俗資料多数を展示。入館料300円と、食事をすれば無料で句会が出来る。074712214013 予約が必要。椅子テーブルでの句会の定員は20名。

94

第56回現代俳句全国大会

作品募集

投句締切は
7月31日
(必着)

◆応募規定◆

□投句料

①雑詠2句一組で2千円、何組でも可。
新作未発表作品に限る。「3組(6句)同時投句に限り、6千円を5千円にいたします」

②題詠1句(無料)新元号の漢字1字又は2字を詠込み・題詠のみの投句は不可。
前書き不可。所定用紙使用。〒、住所、お名前、電話番号、協会員・会員外の別を明記。投句料は定額小為替(無記名で)又は現金書留に限る。(必ず作品同封の事)

□送付先 〒101-0021 東京都千代田区外神田6-5-4 倍楽ビル7階 現代俳句協会全国大会係 ☎03-3383-9181 90

□締切 7月31日必着
□顕彰 優秀作品を協会の機関誌「現代俳句」に発表するほか、協会刊行物に採録。

□賞 大会賞、各後援団体賞、特別選者賞、秀逸賞、佳作賞、他。

□全国大会

平成31年11月16日(土)午後一時より、「東天紅」上野店〒110-0008 東京都台東区池之端1-4-33 ☎03-3382-8151 11

□記念講演 森まゆみ先生(作家・東京大学大学院情報学環客員教授「根岸に生きた子規」)

□講師 中村和弘会長はじめ協会幹部

□後援 文化庁、毎日新聞社、読売新聞社、産経新聞社(他新聞各社にも申請中)

□懇親会 午後5時より(会費6千円)

【主催】現代俳句協会 【後援】文化庁・毎日新聞社・読売新聞社・産経新聞社 (他新聞社にも後援申請中です。)

平成30年度 決算報告書 平成31年4月27日
 (自・平成30年4月1日～至・平成31年3月31日) 関西現代俳句協会 (単位: 円)

収入の部		支出の部	
項 目	金 額	項 目	金 額
前年度繰越金	807,933	総 会 費	730,703
本部交付金	1,269,000	会 議 費	21,506
総 会 費	538,000	句 集 祭	567,092
句 集 祭	423,000	青 年 部	200,000
定例俳句会費	53,000	印 刷 費	263,327
		事 務 費	7,786
		通 信 費	194,236
		交 通 費	31,400
		役 員 手 当	331,024
		定例俳句会費	70,000
		ホームページ費	120,000
		小 計	2,537,074
		次期繰越金	553,859
合 計	3,090,933	合 計	3,090,933

三菱東京UFJ銀行普通貯金 円(利子 円含む)

現金 553,859円

収入 3,090,933円 - 支出 2,537,074円 = 553,859円

残金 553,859円を次年度へ繰り越します。

上記の通り、平成30年度の収支決算報告を致します。

会 計 村田あを衣

上記の通り、厳正に処理されたことを認め、報告いたします。

平成31年4月4日 会計監査 古梅 敏彦 辻本 孝子

平成31年度 予 算 平成31年4月27日
 (自・平成31年4月1日～至・令和2年3月31日) 関西現代俳句協会 (単位: 円)

収入の部		支出の部	
項 目	金 額	項 目	金 額
前年度繰越金	553,859	総 会 費 (会場費・親睦会費)	730,000
本部交付金	1,269,000	会 議 費	30,000
総 会 費 (会場費・親睦会費)	540,000	句 集 祭 (会場費・親睦会費)	570,000
句集祭参加費 (会場費・親睦会費)	430,000	青 年 部 (講演会・句会他)	200,000
吟行参加費	100,000	印 刷 費 (会報・その他)	270,000
		事 務 費 (事務用品)	10,000
		通 信 費 (郵送料・電話代・その他)	200,000
		交 通 費	35,000
		役 員 手 当	330,000
		雑 費 (慶弔費・消耗品代)	30,000
		吟行会場費	20,000
		ホームページ費	120,000
		次期繰越金	347,859
合 計	2,892,859	合 計	2,892,859

関西現代俳句協会

ホームページの紹介

関西現代俳句協会では二〇〇四年十月からホームページを開設しています。

ご覧になるためには、次の三つの方法のいずれかでアクセスしてください。

- ・パソコンや携帯電話のブラウザのアドレス欄に「<http://kangempai.jp/>」を直接入力。
- ・Googleなどの検索サイトで「関西現代俳句協会」と入力。
- ・QRコード読み取り機能のある携帯電話でこのページのQRコードを読み取る。

インターネットを使用されない方には、ご理解困難な点もありますので、次にホームページの内容をご紹介します。

1・トップページ「今月のエッセイ」
会員のエッセイを毎月更新で掲載し

ています。二〇〇五年一月よりスタート。

バックナンバーもご覧頂けます。

2・協会の入会案内

入会の方法と案内、問合せ先を記載しております。

3・新着情報

ホームページ開設以来の更新情報や協会情報を掲載。

4・協会の概要

関西現代俳句協会の略史、協会会報の全頁紹介（32号より）。

活動内容（総会、理事会、運営委員会、企画委員会、講演会、全国大会、句集祭、俳句大会・吟行会・定例会）、役員構成、事務局の所在を記載。

5・結社紹介

五十音順と府県別がある。いずれも結社・俳誌名、主宰・代表者名、発行所の所在地、発足年月を記載。（依頼により随時更新）

6・会員の著作

ホームページ開設以来の会員の句集、評論集などの著書を紹介。

7・イベント案内

協会主催の各種イベント、シンポジ

ウム、全国大会、句会等のお知らせ。

8・青年部ホームページ

青年部員の作品や招待作品、連載エッセイ、句会・勉強会・シンポジウムなどの行事案内と記録を掲載。関西現代俳句協会青年部により企画運営されています。

9・リンク

協会関係や協会のホームページ（サイト）やブログを紹介しているページです。

以上

掲載ご希望の情報について、また、結社についての紹介、会員の皆様のホームページやブログ等のリンクをご希望の方は事務局までお知らせください。（事務局）



QRコード

謹 悼

平成三十年八月一日より、本年四月末日迄の期間中に現代俳句協会にて受け付けた、ご逝去会員のお名前をお知らせし、謹んで哀悼の意を表します。

(敬称略、括弧内は住所と所属結社)

記

石丸寿美子 (摂津市・白壁 杭)

中川きよし (奈良市・幻)

中山 正子 (京都市・海程 木)

▲編集後記▼

◆今年から事務局長になりました西谷剛周です。会長以下、役員理事の皆さんのご意見を聞きながら、会報を通じて会員相互の交流の呼びかけ、親睦を図る企画を模索したいと考えています。会員皆さんの中で提案等ありましたら気軽に寄せ下さい。

◆「吟行の役が当たると、大変です」こんな声よく聞きます。吟行地の下見、昼食の場所、句会場の確保等、幹事さんは大変です。そこで、幹事や参加者の負担を軽減する方法として、駅から送迎してくれる店、あるいは昼食に引き続き、その店で句会が出る奈良の店を、紹介するコーナーを設けましたので、是非参考にして下さい。また、皆さんの中で、同じような情報、あるいは吟行地のお勧めの情報がありましたら、お知らせ下さい。なお奈良へ吟行される折はご一報頂けたら、奈良の情報を提供させていただきます。

◆新会員の一句、句集祭は次回の会報で紹介させていただきます。新会員の皆さんには、8月下旬頃に代表の一句をお願いする文書を送付させていただきます。句集を上梓した方を、会員皆で祝うというような催しは、関西現代俳句協会だけです。是非とも参加をお願いします。

句集祭の開催が午後3時からですので、吟行感覚で参加頂けるよう、地元お勧めの吟行コースを紹介した案内文にしたいと検討中です。また奈良は日本酒発祥の地です。この機会に奈良の酒も味わって下さい。

◆最後に、吉田会長・上藤事務局長、六年間ご苦労様でした。引き継いでまだ一ヶ月余りですが、お二人の大変さを実感しています。会報の写真は、京鹿子の福嶋雄山さんにお願ひしました。ありがとうございました。

西谷剛周

関西現代俳句協会会報・第48号

発行：令和元年六月一日

発行人：久保 純夫

編集人：西谷 剛周

事務局：〒六三六―〇一四一

奈良県生駒郡斑鳩町

稲葉車瀬一―四一〇

TEL/FAX

〇七四五―七四―〇八三四